

メッセージ「その怒りは正しいですか？」

牛田 匡 牧師

聖書 ヨナ書 3章10節－4章11節

一昨日 3 日から九州地方では記録的な大雨が続いていて、熊本県では球磨川が氾濫し、既に何人もの方々が亡くなったり、行方不明になっていたりと報じられていました。今日もまだ雨が降り続けているようですし、これ以上の被害が出ないように、また今、恐怖と不安の中で避難しておられる方々の上に、神様からのお守りがありますようにと、祈っています。

毎年のように地震や台風、大雨や洪水などの災害に襲われていますが、今年はとくにコロナへの対応のことがあり、これまでのように人と人とが身近に接することができない、という制約があるために、災害への対応もより一層難しくなっているのではないかと思います。しかし、そのような中であっても、すぐに緊急支援に動き出している方々もおられます。

私たちの教会からもささやかながらクリスマス献金を送っている「一般社団法人 神戸国際支援機構」の方々は、3日に大雨が報じられるとすぐに準備をして、昨日の早朝には500人分の食事の炊き出しの準備を車に積み込んで出発し、750キロ以上の道のりを走って、現地入りされたそうです。また4年前の熊本地震の際に発足した「九州キリスト教災害支援センター」も、早速支援の準備に入ったとの事でした。まだまだ被災の渦中にあり、被害の現状も分かっていない所が多くあると思います。現地は山々に囲まれた地域であり、土砂崩れなどがあると、簡単に集落が孤立してしまうそうです。一つの避難所に大勢が集まるのではなく、小さな避難所がいくつも散在しているようですので、行政の支援がどのように行き渡るのかが心配です。ですが、最終的には人を支えるのは、人の手でしかありません。神様は人の手を介して働かれます。今、この地にあって私たちに出来る事を考えて行きたいと思います。

今日の聖書のお話は、ヘブライ語聖書の中から預言者ヨナの物語でした。全体で4章、この聖書ではわずか5頁しかない短い物語です。一番有名なのは、大きな魚に飲み込まれて、そのお腹の中に三日三晩いたというエピソードで、あの童話『ピノキオ』のモデルにもなっています。全体の粗筋は、次のようになっています。ある日、主人公のヨナに突然「主の言葉」が臨み、「ニネベに行け」と言

われます。しかし、彼は神様の命令に「嫌だ」と言って逆方向に船で逃げ出しました。すると、乗っている船が大嵐に遭い、海に投げ込まれた彼は、大きな魚に飲み込まれ、魚のお腹の中で必死に神様に助けを祈ると、三日目に生きて地上に吐き出されました。それから彼は、命を助けられたので、神様に命じられた通りにニネベに行って、神様から預かった預言、「あと 40 日すれば、ニネベは滅びる」という言葉を伝えたところ、ニネベの人たちは異教の神々を信じる外国人であったにも拘わらず、主なる神に立ち返り、悪の道を離れたので、神様は人々を見て、予告されていた災いを下すのを思い直されました。しかし、物語はそれで終わりではありません。先程読んだ今日の箇所ですが、預言を告げ知らせていたヨナは、自分が預言したようには、ニネベが滅ぼされないので、腹を立てました。そして神様に向かって「生きているよりも、死んだ方がましです」(4:3, 8)、「怒りのあまり死にそうです」(4:9)とまで繰り返す文句を言いました。しかし、「恵みに満ち、憐れみ深い神であり、怒るに遅く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思い直される方」(4:2)である神は、「12 万以上の人間と、おびただしい数の家畜たち」がいるニネベの都を「どうして惜しまずにいられるだろうか」(4:10)と語られて、この物語は終わります。

ヨナの頭の上に日陰を作った「とうごま」というのは、日本で言うとキュウリやヘチマのようなウリ科の植物だろうと言われていますが、この物語では、この植物以外は神様から撃たれて滅ぼされているものはありません。ですから、全体としては「めでたし、めでたし」でハッピーエンドだと言えるかと思いますが、主人公のヨナ自身は何だか納得がいかないようです。神様はヨナに「あなたは怒っているが、それは正しいことか」(4:4, 9)と、2 回に亘って問いかけられました。どうしてヨナは怒っているのでしょうか。二つ目の怒りは「自分のお気に入りのおとうごまを、神が枯らしてしまったから」だと思いますが、この物語では、民族の壁を越えて全人類を救うことを望まれる神と、それとは逆に、自分中心でしか物事を考えないヨナとが、対照的な存在として強調して描かれているように感じます。しかし、それは本当にヨナの性格の問題、個人的な特性の問題だったのでしょうか。

歴史的に見ると、それは決して、ヨナの個人的な問題ではなかったことということが分かります。「ニネベ」という町は、紀元前 8 世紀頃に繁栄を極め地中海世界を広く支配したアッシリア帝国の首都でした。アッシリア帝国というのは、当時、南北二つに分かれていた古代イスラエルのうち、北イスラエル王国を侵略

し、南ユダ王国をその属国として支配した残忍さで有名な大帝国でした。当然、古代イスラエルの民たちにとっては、自分たちの民族や国土を奪った憎き敵だったわけです。「その首都に行って、悪の道を離れるように伝えて来なさい」と神様に命じられても、「行きたくない」のは当然の思いだったでしょう。むしろ、「何もしないで 40 日が過ぎて、ニネベにはさっさと滅んでほしい」というのがヨナの本音だったのではないかと思います。だからこそ、東のニネベに行きなさいという言葉聞いた時、反対方向の西のタルシシュへと逃げようとしたのでしょう。「神様の命令に従わず、神様に対して怒った自分勝手な預言者」という以前に、ヨナもまた古代社会における軍事力や宗教という暴力によって傷つけられていた被害者の一人でした。

先日、「児童虐待の根っこを探る」(子ども情報研究センター『はらっぱ』2020年3月号)という記事を読みました。近年、児童虐待は増え続け、社会問題として大きく取り上げられるようになっていますが、児童虐待も、DVも、様々なハラスメントも、それらはあくまでも「フツウの人たちはしないことであり、一部の特異な人だけがしてしまう異常行動であり、それらを行ってしまう人たちの個人的な問題行動として、治療していくべき病気である」というように考えられていると思います。しかし、その「児童虐待の根っこを探る」という記事の中で、安富歩さんが指摘しておられたのは、現在私たちが生活している「近代国民国家」というもの自体が、戦争に次ぐ戦争という歴史の中で生み出され、戦争に勝ち抜くための富国強兵を第一目標とする国家体制であり、外に対しても内に対しても暴力性をもっている制度である。それ故にそのひずみが、様々な虐待や暴力という形になって顕れているということでした。確かに「戦後 75 年」と言っても、今は平和になったと言われてはいますが、実際には熾烈<sup>しれつ</sup>な競争があり、格差があり、様々な暴力があります。

いつ発射されるかも分からない核兵器、いつ制御不能になるかもしれない原子力発電所などを、いくつも抱えていることだけを取り出して見ても、私たちは日々いかに他者によって命を脅かされながら暮らしているか、暴力を受けながら生きているかということが分かるかと思えます。現代に生きる誰もが暴力・虐待の被害者であり、またその加害者にも容易になり得ます。これまで当たり前と生きて来た現実、自分が正しいと思って受けて来た教育なども、考え直してみると、決して良いものばかりではなく、むしろ暴力的であったものも多かつ

たのではないのでしょうか。例えば、「昔の親は厳しかったが、威厳があった」と昔を懐かしんで語る時、そこには現代の虐待に通じるものが、形を変えてあったのではないかと思いますし、その当時の親たちもまた戦争を中心とした社会情勢という大きな暴力の被害者たちだったのだと思います。

今日の聖書の物語では、ヨナは神様から「あなたの怒りは正しいか」と問われていますが、そのヨナの怒りの背景には、アッシリア帝国から古代イスラエル民族が受けていた暴力があり、差別がありました。更に嵐を始めとする災難があった際には、「この災難が我々に降りかかったのは、誰のせいかな」（1:8）と因果応報的に考えたり、「私を担いで、海に投げ込めば、嵐は静まるでしょう」（1:12）という人柱、犠牲を求めたりするような宗教思想がありました。そのような宗教的な暴力をも受け続けていたからこそ、ヨナは「恵みに満ち、憐れみ深い神であり、怒るに遅く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思い直される方」（4:2）である神様の民族を超えた赦しと救いという判断を、素直に受け入れることができずに、怒ったのではないかと考えられます。

ここで「あなたの怒りは正しいか」と書かれているヘブライ語（トープ）は、他の言葉で言い換えると、「その怒りは良いことか」「ふさわしいことか」となります。怒ることが悪いのではなく、その怒りは適切なのか、何に対して怒っているのか、何を目指しているのか、ということが大切なのでしょう。イエス様もまた、然るべき時には怒る方でした。相手の言動が自分の中の傷に反応して、反射的に怒り、相手に暴力を振るうのではなく、むしろ<sup>しいた</sup>虐げられている人たちの解放のために、抑圧する側に対して抵抗の声を上げること、連帯と共同の手を伸ばすことこそ、今必要とされていることなのではないかと思います。

コロナや大雨など、様々な災害が立て続けに起こっていますが、それでも今年の開催が見送られた東京オリンピックの準備は止まりませんし、戦争の準備も止まっています。今日の前の「いのちを守る」ことよりも、一部の人たちの面子と利権を守ることが優先されています。そのように今もなお暴力が振るわれ続けている現代社会ですが、それでもなお、そこにも神の国は来ています。「目を上げて畑を見なさい。すでに色づいて刈り入れを待っている」（ヨハネ 4:35-36）……。私たち自身が、癒されることを必要としています。私たち自身が不適切な怒りから解放されて、小さくされている人たちのために、この手足を用いて行けるように変えられたいと祈り求めながら、今日もここから歩み出して行きます。